

SEMINAIRE OUVERT PERMANENT

décembre 2005

セミナー通信 2005年12月

公開セミナー『心的構造論』 藤田博史 (精神分析医)

第34回第34講「精神病の構造的治療理論とその治療技法 (22)」

2005年12月10日(土) 13:30-16:30 (開場時間も13:30になります)

第35回第35講「精神病の構造的治療理論とその治療技法 (23)」

2006年1月14日(土) 13:30-16:30 (開場時間も13:30になります)

会場：日仏会館 509号室 聴講料:1000円

日仏会館 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 JR 恵比寿駅東口から「動く歩道」経由で徒歩10分

主催：ユーロクリニック 協賛：ドール・フォーラム・ジャパン

問合せ先：ユーロクリニック文化部 TEL: 042-308-7637 E-mail: ys@euroclinique.com

SÉMINAIRE OUVERT PERMANENT

FUJITA, Hiroshi (psychiatre-psychanalyste)

Le 34ème SÉMINAIRE samedi 10 décembre 2005-----13h30-16h30

Le 35ème SÉMINAIRE samedi 14 janvier 2006-----13h30-16h30

SALLE#509 DE LA MAISON FRANCO-JAPONAISE

Frais de participation :1000yen LA MAISON FRANCO-JAPONAISE

10 min.à pied depuis la Sortie Est de la Gare d'Ebisu(ligne JR Yamanote)

Organisation:L'EUROCLINIQUE Collaboration:DOLL FORUM JAPAN

Renseignements: DIVISION CULTURELLE DE L'EUROCLINIQUE

TEL: 042-308-7637 E-mail: ys@euroclinique.com

発行
EUROCLINIQUE
編集
ユーロクリニック文化部

目次	
公開セミナー案内	1 『ブレーキを踏もう』 佐藤良平 5
『セミナー断章』 藤田博史講義	2 ヨーロッパ美術紀行 清水由美子 6
	3 ユーロクリニック案内 7
	4 information 編集後記 8

SÉMINAIRE OUVERT PERMANENT

公開セミナー『心的構造論』より

「セミナー断章」

講義 藤田博史

編集 榊山裕子

Séminaire privé

トピカ 112 「性関係は存在しない」より

jeudi 17 novembre 2005 2005年11月17日(木) クレマスター (東京・新宿)

今回は、公開セミナーからの抜粋ではなく、月1回の日仏会館での公開セミナーとは別に、毎週木曜日、新宿・クレマスターで開催されている藤田博史のプライベートゼミ、フジタゼミで行なわれた講義より抜粋します。

この講義は、聴講者に論点提出をしていただき、藤田及び聴講者全員で自由に討議する「トピカ」より、2005年11月17日に行なわれたトピカ112 (30分) 小山太郎氏 (湘南短期大学) テーマ「性関係は存在しない」として行なわれたものです。興味深い論点を提出してくださった小山氏に感謝します。なお通常のセミナーは、藤田博史の講義をほぼそのまま筆記しておりますが、今回は、若干の編集を加えていることをご断りいたします。

Contents

今号

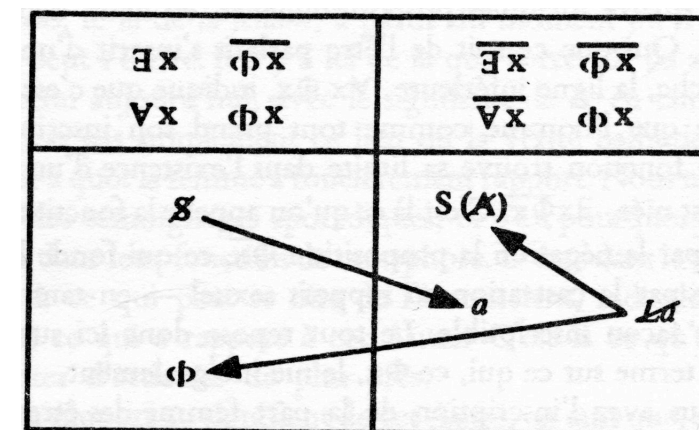
- 1) 性別化の論理式
 - a 性別化の論理式
 - b 古典主義論理と直観主義論理

次号

- c 閉鎖集合と開放集合
- 2) ファンタスムのベクトル

精神分析医ジャック・ラカン (Jacques Lacan) は、1972-3年に行なった第20回セミナー『アンコール Encore』の第7回講義『恋文 Une letter d'amour』の冒頭に、「性別化 sexuation の図表」を掲げている。

性別化の図表の上段は4つの「性別化の論理式」、下段は「ファンタスムのベクトル」であり、左枠は「男性」、右側は「女性」を表わしているとみなすことができる。(註1)。



1) 性別化の論理式 Formules logiques de la sexuation

a 性別化の論理式 Formules logiques de la sexuation

$$\begin{array}{cc} \text{①} & \exists x \quad \overline{\Phi x} \\ \text{②} & \forall x \quad \Phi x \\ \text{④} & \exists x \quad \overline{\Phi x} \\ \text{③} & \forall x \quad \Phi x \end{array}$$

藤田（以下、Fと表記） この存在記号(∃)の方、①の $\exists x \quad \overline{\Phi x}$ は、フランス語で“ Il existe au moins un x Φx ”と読みます。

この全称記号(∀)の方、② $\forall x \quad \Phi x$ は“ pour tous x Φx ”と読みます。「全ての x に対して Φx という関数が成り立つ」ということです。

これは関数(fonction)のつもりでやっているのです。「ファルスの隠喩作用」と言ってもいいし『エクリ Écrits 』(註2)のなかでは“ Die Bedeutung des Phallus ”と言っています。これは論文のタイトルですが、このドイツ語をそのままフランス語に訳すと La signification du Phallus です。

これ(signification)を言語学をやっている人はどう訳すかという「意味作用」と訳す。「ファルスの意味作用」です。ですからこれは、x に Φ (grand Phi 大文字のファイ)つまり「ファルスの意味作用」が及んでいる、ということです。

小山（以下、Kと表記） それは「去勢強迫」を経験した、ということですか？

F 去勢強迫はまったく関係ありません。去勢強迫は生後かなり経ってから生じるものです。4、5歳の頃、「そんなことやっていると、ちんちん切っちゃうぞ」みたいなことを言われて、それで男の子は震え上がって、そこから去勢不安が生じてエディプス・コンプレックスのなかに確実に入っていく土台ができるわけです。現実にかかる発達段階上の去勢強迫とかそういうものとは無関係に、ラカンがここで提示しているのは、ロジックな、論理的な意味での——つまり人間は「語る存在 l'être parlant」であるから、語る主体を構成しているのはシニフィアン signifiant ——そのあるシニフィアンをとりあえず x と呼ぶわけです。X というのは「あるシニフィアン」のことなのです。

Φx (grand Phi x) というのは「ファルスの意味作用を受けているあるシニフィアン」という意味です。

$$\text{①} \quad \exists x \quad \overline{\Phi x}$$

この存在記号の式①の意味は「少なくともある一つのシニフィアンに対してファルスの意味作用が及ばない」。だから少なくとも1個、ファルスのシニフィアンを受けていないシニフィアンが存在する。それはとりもなおさずファルスそのものということです。「少なくとも1つ au moins un 」(註3)という言い方が非常に面白くて、ひょっとしたら2つあるかもしれない。

シュレーパーの議論に及んだ時に、ラカンは trois pieds imaginaires (想像的三脚) という言い方をして、その精神病者が崩壊しないで済むために、とりあえず少なくとも3つの足が必要だ、と言っています。ですからもしかしたらファルスに相当するものは3つあるかもしれません。わかりませんよ、2つかもしれない。少なくとも1つある。つまりこれは何を言っているかというファルスそのもののことを言っているのです。だからちょっと大胆な言い方をすると、

① Il existe au moins un x grand Phi x

これは、 Φ (grand Phi 大文字のファイ) というシニフィアンそのもののことを言っているのです。

$$\text{④} \quad \exists x \quad \overline{\Phi x}$$

これ④はラカン流の表記ですが、このように表記する論理学者もいます。これは「 Φ の意味作用が及ばない x が、少なくともひとつあるわけではない」。

K 全部及んでいるかというところでもない、ということですね。

F いや、全部及んでいるかというところでもない、というのは ③

$$\text{③} \quad \overline{\forall x \quad \Phi x}$$

③は「全てのxに対してΦの意味作用が及んでいるとは限らない」

②は「全てのxに対してΦの意味作用が及んでいる」

④はちょっと複雑で「Φの意味作用が及んでいない x があるわけではない」。

だから「ある」、「ある」と言ったら誤解になるけれども、あるっばいんだよ、これは(笑)。あるかもね、と言ったところですよ。

『性倒錯の構造』では「ある x に対してΦの作用が及ばないということはない」と書いています。及ぶんだよ、及ぶんだけれど、Φの作用としてではない……。

K ④は、女性にとって男性のファルスのように機能しているもの、ということですね。

F そう。女性の場所において、あたかも男性におけるファルスであるかのように振る舞っているなものか。それは、予測はたつけれども、それを積極的に「ある」ということはできない、ということかな。女性におけるブラックホールみたいな部分です。これが謎に通じるわけです。女性の謎の1つはそこにある。謎の2番目は「全てのシニフィアンにファルスの意味作用が及んでいるわけではない」。つまりファルスのシニフィアンが及んでいないシニフィアンがフラフラしている。それが女性の謎の2です。

K 全てということの範囲が不明なのですね。つまり女性は「開放集合」になっている。ですから「閉鎖集合」の論理で考えられる男性の性別化の仕組みと女性の性別化の仕組みは、そもそも開放集合と閉鎖集合の世界、違う位相にいるので、その間の関係というのは考えられない、というか、記述し得ないというのが「性関係は存在しない」ということであると、理解しました。

F 本当かな？という感じがするよね。ラカンの言っていることが正しいという保証はどこにもない(笑)。

b 古典主義論理 logique classique と直観主義論理 logique intuitionniste

F 直観主義論理の最大のポイントは排中律を認めないということでしょう(註4)。 $\neg A=B$ (non A イコール B)ではない。Aではないと言ったらBが成り立つということはない。古典論理は開放集合とか無限に対して成り立たない。だから開放集合(ensemble ouvert)とか無限集合(ensemble infini)に対しては直観論理的なアプローチでないとやはり歯が立たないということですね。閉鎖集合(ensemble fermé)であれば、 $A \vee \neg A$ 「Aか non Aか」といったらそれで全ての要素を尽くすことができるけれども、「Aか non Aか」といっても、Aでも non A でもない領域があれば駄目なわけで、直観主義論理学では A でも non A でもない領域は一個一個つぶさにチェックしなければいけない。現実チェックする作用が必要なのです。世の中の女性について論じる時は、この世に或る全ての女性をチェックしなければいけない。そこにこの世にドン・ファンとかカサノヴァが現れる必然性がある。ドン・ファンとかカサノヴァは全ての女性と同じかどうかチェックしている(笑)。

S 本当かな。

F そうですよ。

S 普通、ドン・ファンとカサノヴァってタイプが違っていて言われていますよね。ドン・ファンは、ある母的なものがあるとしたら、同じものを求めている。カサノヴァは極めて個別的に、一人一人の女性の違いを求めている。

F その通りです(笑)。ドン・ファンは次々と女を替えていく。カサノヴァは全ての女を囲い込む(笑)。(つづく)

註1 より正確には右側は「男性 homme 」に対する「非男性 non-homme 」＝「斜線を引かれた女性 la femme 」を表わす。「ラカンによれば<語る存在 être parlant, parlêtre >は男性 homme と非男性 non-homme に区分される」(藤田博士「女性同性愛の病理」『性倒錯の構造』p71)

註2 『エクリ』 Écrits, Seuil,1966

註3 「この式は<父の作用 la fonction paternelle>あるいは<去勢の作用 la fonction de la castration>を表わしており、この領野に所属するシニフィアンはいうまでもなく<父—の一名 Nom-du-Père>である。これにかんしてラカンは「Φの作用が及ばない x が少なくとも一つ存在する」という表現の『少なくとも一つ(オ・モワン・ザン au moins un)』という音のなかに「男(オム homme)」を聞き取り、これを「オモワンザン(hommoizn)』という一語で表現する」(藤田博士「女性同性愛の病理」『性倒錯の構造』p75-76)

註4 「直観主義論理学 logique intuitionniste (ブラウアー Brouwer)によれば、開放集合における諸要素は一個一個順を追って証明されるために、必ずしも<排中律 le principe de tiers exclu>が真であるとは限らない。つまり、開放集合において、未知の要素の集合をRとしたとき、このRを、非Rを用いてR=非非Rと直ちに演繹することはできないのである」(藤田博士「女性同性愛の病理」『性倒錯の構造』p73)

ブレーキを踏もう

佐藤良平

連載 21 失われた名文をもとめて

私は文章を売って幾許かのお金を得ている。現在の職業に就いた時、私は文章書きの師匠筋に当る人物から「プロたる者、ギャラが出ない仕事を請けてはいけない」と厳しく言い渡された。ただし、このリーフレットに載る原稿を書いても稿料は一切もらえない。実を言えば、私が守るべき“売文の掟”は他にもいろいろあるのだが、私は師匠の主張にも一理あると認めつつ、そんな言いつけに唯々諾々と従うような者に売文業が務まっていたまると考えているので、不肖の弟子たる私の行状については諦めてもらうしかない。

というわけで今回は、最初から受取れるはずのない幻の稿料と引換えに業務上の愚痴を書いて鬱憤を晴らすことにする（そういえば「表に出る原稿に内輪の愚痴を書いてはならない」という掟もあったっけ）。もちろん、ここに書くしか使い途がないようなネタだから、他の媒体に書ける種類の話ではない。いつもと同じで、これも捨てネタの一つだ。

最近、日本語——ことに書き言葉が簡単になりすぎている。

もちろん、この傾向が一概に悪いことだとは言えない。それは分っている。文章全般をいたずらに高尚かつ難解な存在に祭り上げ、一部の者たちしか書けない／読めないような世の中が再びやってくるとしたら、おぞましい事この上ない。

文章に要求される機能で最も重要なのは、書き手から読み手に確実に情報が伝達されることだ。場面によっては、誤読の可能性が許されない文章もある。使い捨ての情報を伝達するのに、わざわざ持って回った美文調で書かれたって、読み手にしてみれば端迷惑なだけだ。その意味では、簡潔に、明快に、読みやすく書かれた文章が望ましい。

しかし、何事にも限度というものがある。どんな文章でも平易であればあるほど優れているのだろうか？ 当然だが、それは場合によりけりだ。いつ如何なる時でも文章の平易さだけが優先されて、平易になるべきでない文章まで平易になってしまうのでは困る。平易な書き方では表現できない領域は依然として存在しているからだ。文学に課された重責の一つは、その領域の探索であった。ところが、近年は文学作品に対しても「平易に」という圧力が強まっているせいか、表現の過度な簡素化が進みつつあると感じている。書き手にとって「何を書くか」は重要な問題だ。しかし、それと同じくらい「どう書くか」も重要である。然るに現状は前者だけが重視され、後者が不当に軽く見られている。

読み応えのある文章に出会う機会が減った。文章が伝える内容に関する話ではない。文章に技巧を凝らす風潮が減退しているのだ。無論、技巧さえ優れていれば文章の内容は等閑であっても構わない、と言いたいのではない。書き手の側にあるべき「上手い文章を書こう」という意欲がどんどん希薄になっていくように思える。あらゆる文章のレヴェルが急速に幼稚になっている、とでも言えば良いだろうか。これは深刻な問題である。

書き手が読み手を甘やかす調子の文章を、私は好まない。書き手から「お前なんか、せいぜいこの程度の読者なんだろ？」と低く見積もられるのは嫌だ。こっちは真剣勝負で読むんだから、書く側も真剣勝負で書けよ、と言いたい。ぬるい文章を与えておいて読者が気付かぬうちに洗脳する姑息さではなく、正々堂々と正面から向ってくる潔さを買う。

例として挙げるのが適当かどうか判らないが書いてみる。私は井上ひさしの作品が好きで、全作品とは言わないが、かなりの量を読んだ。しかしながら、彼の文体はどうしても好きになれなかった。できる限り平易に平易にと努めるあまり、子供相手にいちいち噛んで含めるような調子になるのが気に障る。彼は、その気になれば幾らでも難しい文章を書ける筆力を持っているのは明らかだ。ということは、彼は文章を平易に書くことに関して強固な信念を持っているに違いない。言うまでもなく彼は賢明な作家であるから、私がどう思っていようが彼の信念は間違っていないだろう。「自分の作品はできるだけ多くの人に読んでもらいたい」「どうせ読むなら楽に読んでもらいたい」「難しい文章に慣れている人が平易な文章を読むのは何でもないことだが、そうでない人が難しい文章を読むのは骨が折れる。だから文章は平易である方が望ましい」。これはこれで見上げた心がけだ。

私とはいうと、彼の文章を読む度に、まるで彼から小馬鹿にされたように感じる。こっから頼んだわけでもないのに、高い所から手を差し伸べられたような気持ちだ。読者が彼と対等な高さまで上ることは、あらかじめ彼の文体によって拒否されている。「あなたは歯ごたえのあるステーキを食べたいかも知れないけど、うちの店には歯があんまり丈夫でないお客さんも来ますから、みんなと一緒におとなしくハンバーグをお食べなさい。うちではステーキは出しません」。そんなふうに諭されている気がする。（ここで重大な掟をまた一つ思い出した。「貶す相手が知らない場所で悪口を書いてはいけない」）。

井上ひさしは、まだ良い。文体が気に入らない読者をも、作品自体の面白さで読ませてしまう力があるからだ。彼が作家として一流の志を持っていることは、それに賛同するかどうかは別として、疑う余地がない。限定的ではあるが、私は今でも彼を尊敬している。

私が本気で案じているのは、もっと年若い書き手たちだ。彼らは、より良い文章を書こうとして日常的に訓練を積んでいるだろうか。少しでも読みでのある日本語を書こうと努めているか。今より5年後、あるいは10年後に、今日よりも優れた日本語を操れるようになりたいと願っているか。いや、それよりも先に、彼らが作家になる前に、まともな本をどれだけ読んできたのか。先達の成果に敬意を払いつつ学んだ経験があるだろうか。

こう述べながらも、私は若年の書き手たちに対して同情的である。なぜなら、いまや難しい日本語を書きたいと思っても、そんなものには値が付かないからだ。多くの場合において文章書きの仕事は受注産業だから、我々は発注側に頭が上がらない。だとすれば、文章の平易化は専ら書き手の側から起ったわけではなく、彼らに（より正確に書くなら、我々に）仕事をくださる連中の事情も少なからず反映している、と考えてもらいたい。

「文体の難易度を下げることで、さらに多くの読者を獲得し、売上げを増やせるとすれば、それを妨げる理由はない」とする“高度な経営判断”に基づいて、出版社が商品の程度を自ら望んで切り下げるとしても何ら不思議ではない。その結果、書き手に、読者に、あるいは日本語に将来どんな災厄が降りかかったとしても、それに対して彼らが責任を取ることは金輪際ありえない。そんな奇妙な時代を我々は生きていく。実に興味深い。

さとう・りょうへい（文筆業）

ヨーロッパ美術紀行 （20）
カラヴァッジョに魅せられて 4

清水由美子

サン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂の《聖マタイ伝》



ホモエロティックな怪しさからもジョルジョーネ風の詩情からも程遠い。登場人物の多い叙事的な大画面にカラヴァッジョが気合をこめて取り組み、たちまちローマ中の話題をさらうことになる《聖マタイ伝》3点はサン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂で見ることができる。ローマのカラヴァッジョ巡礼のハイライトになるはずだ。

フランチェージはフランス人を意味するイタリア語のフレンチエーゼの複数形だから、ローマのフランス人のための、聖ルイ（聖列されたフランス王ルイ9世）に捧げられた聖堂ということになる。パンテオンとナヴォーナ広場の間に位置するマダマ宮殿の北に隣接している。マダマ宮殿とはメディチ家のローマの拠点であり、当時、無名のカラヴァッジョを見出したデル・モンテ枢機卿が住んでいた。そこにカラヴァッジョも移り住んだ。現在ドリリア・パンフィーリ美術館所蔵の《エジプトへの逃避途上の休息》と《梅俊のマグダラのマリア》、枢機卿の別荘を飾る天井画《ユピテル、ネプトゥヌス、ブルート》、枢機卿のサークルの顧客のための《果物籠》、枢機卿がトスカーナ大公フェルディナンド・メディチに贈った《メドゥーサ》などが制作された時代である。すべてプライベートな仕事である。公共の仕事の注文はまだない。教皇庁の仕事をこなす若いライバル画家を意識してか年齢のさばを読んでいたが、公共の聖堂の祭壇画を手がける話がまとまった時、カラヴァッジョはもう27歳だった。とはいえ、まだ27歳。公に認められるための初めての大きなチャンスの到来に武者震いをする思いだったのではないだろうか。

メディチ家はフランスと繋がっていたから、同家と懇意だったデル・モンテ枢機卿がフランス人ネットワークに人脈があったことは想像に難くない。ローマに出てきた頃のカラヴァッジョがしばらくそのアトリエで働いていた当時の人気画家ガルビーノがコンタレッリ礼拝堂のための祭壇画制作の契約を取っていたが、その完成がローマの大事業である1600年の聖年に間に合わないことが明らかとなった。そして、デル・モンテの後押しのおかげがつついにカラヴァッジョにお鉢が回ってきたのだ。

薄暗い室内に入ると奥の方にひとだかりのする一角があるから迷わずに行きつける。1ユーロ硬貨を数枚持参するといい。数分

経つと照明が切れてしまい、次々と硬貨を飲み込んでいく。カラヴァッジョはいつも聖堂の窓から入り込む光を計算にいった画面作りをしているから、強いライトでほ煌々と照らされた油彩を眺めるのは邪道のような気もする。画集の艶々したカラー図版に慣らされている私たちの悲しい性が、本物を目の前にしても図版の再現を求めてしまうのかもしれない。

さて、何と言っても圧巻はカラヴァッジョが最初に手がけた側壁の2枚《聖マタイの召命》と《聖マタイの殉教》である。共に画面には表れないどこからかの光源に照らされた人物群が、聖マタイをめぐる重要な出来事が展開しつつある一瞬のドラマを繰り広げている。

取税人レビが座しているところにキリストが歩み寄り、「私についてきなさい」と呼びかけたのが12使徒の一人で福音書の記者となるマタイの召命である。画面右端にキリストが現れる。お供の聖ペトロの体でキリストの体の大部分が隠され、手のしぐさすでに踵をかえしつつある足が見える。キリストとペトロが古風な身なりであるのに対して、残りの5人は当世風のファッションであるのが奇異といえば奇異だ。羽飾りの帽子の若者二人は、闖入者の方に空虚な視線を向けている。その隣で右手で貨幣をいじりつつ左手で指差すしぐさをし、きょとんと顔をあげるひげの男と、左端に座り金勘定に余念がないかのごとく視線を落としたままの若者のどちらかがマタイである。解釈がわかれているのである。この絵をめぐる解説を読むことがあったら、気をつけてみてほしい。前者を探る場合は自明のことのごとく書かれているが、後者の場合はまだ異説の域を出していないのか少し遠慮がちかも。それぞれの根拠をここで敷衍する余裕はないが、現物を前にながら前者を疑わなかった私も、今は宗旨替えしつつある。

もっと魅力的で、もっと不思議で、あちこち読んでみても満足できる解答を得られないのが《聖マタイの殉教》である。エチオピアで伝道中のマタイが、結婚の邪魔をされて怒った王の命を受けた兵に聖堂内で殺されるというストーリー。倒れて血を流しているのがマタイであるのは問題ないが、他の登場人物をどう見たものか。絵の中で最も目を引くのは、右手に剣を握り瀕死のマタイを見下ろす半裸の男（洗礼を受けにきた一人？）と、悲鳴を発しているのか口を大きく開けて現場から逃れんとする侍祭役の少年である。この二人には、モデルを生き生きと写したカラヴァッジョのリアリズムとは異なる一種の様式があるように思えてならず、ことさら強い印象を与える。ここにも場違いにも当世風に着飾った数名がいて、振り向きつつ走り去ろうとしており、内一人は剣を握っている。うっかりしていたら見落としそうだが、刺客たちの仲間なのか、たまたまの目撃者なのか、カラヴァッジョその人も登場する。画家本人を描き込むことは珍しいことではないが、奇妙な身なりといいしぐさといいやけに気になる存在である。

ともあれ、カラヴァッジョは、ルネサンス以降に支配的であった技巧的で仰々しく時には冷たいマニエリスムに追従せず、斬新なアイデアで遠い昔の出来事が今ここで観者の目の前で展開されているように思わせるリアリズムを見せつけてアート界にセンセーションを巻きおこしたのだ。時の保守的な教皇のお抱え画家になることはついになかったが、カラヴァッジョの才能と新しさを認めたコレクターやパトロンから注文が相次ぐようになる。

しみず・ゆみこ（ブリュッセル在住）

